



認知症高齢者グループホームにおける サブ共用空間の計画に関する研究

中 野 明* ・守 田 幸 代** ・太 田 千 尋***

A study on the planning of sub-common space at “group homes” for the elderly people with dementia

Akira Nakano · Sachiyo Morita · Chihiro Oota

Residents in the “group homes” for the elderly people with dementia spend a lot of time in the common activity areas. It is well recognized that these common spaces are playing important roles in the group home life. Besides the legally required common areas such as dining rooms and living rooms, some group homes have additional sub-common activity areas.

At three group homes in Hokkaido, we have conducted the time study on daily activities of the residents (where and what the residents are doing), employing the behavior observation method as well as the interviews with the care staff. Purpose of this study is to clarify the influences on the life style of the residents coming from the different kinds of physical environments. Based on the findings, we are to establish a basic guideline for the planning of the sub-common spaces in the future group homes. On the survey day, behavior maps were drawn every 10 minutes from 7 a.m. to 8 p.m. Some of the results obtained from this study are shown below.

Unexpectedly, the sub-common spaces were not so well utilized by the residents. Therefore, it is quite difficult to determine if these sub-common spaces are giving influence on the life style of the residents or not. With the better and more active utilization of such sub-common spaces by the group home managements, these spaces could play more important roles for the residents. Due attention should also be paid to the physical environments when such sub-common areas be included in the space planning of the group homes.

Keywords : Elderly people with dementia, Group home (Group-living), Sub-common space
認知症高齢者、グループホーム、サブ共用空間

1. 研究の背景と目的

認知症高齢者グループホーム（以下、GH）において、入居者の生活の場は共用空間が中心となっており、それが果たす役割の重要性は確認されている（文1）。さらに、共用空間の計画においては、スタッフと入居者が多様な形で関われることを可能にする柔軟性のある空間構成が重要で

あるとされており（文2）、従来のGHの共用空間は、食堂・談話室だけを保有する構成がほとんどであったが、近年では、食堂・談話室に加え、和室を保有するGHも多くみられ、更に、これらの共用空間に加え、サブ的な共用空間を保有するGHが年々増加する傾向にある。

そこで本研究では、サブ共用空間を含めた共用

*本学教授・**本学卒業生(平成14年度卒)・***本学卒業生(平成16年度卒)

空間の平面構成とその形態が異なる GH において、入居者の生活展開に関する実態調査（滞在場所とそこでの行為のタイムスタディ）を行い、日常の基本的な生活行為が行われている場所（生活領域）を分析することにより、共用空間の物理的環境の違いが、入居者の生活展開に与える影響について明らかにし、今後のグループホームの共用空間の計画に関する基礎的な指針を得ることを目的とする。

2. 調査の概要

2.1 調査対象施設の概要

調査は、表1・図1に示した北海道内の3つのGH（以下[H]、[S]、[A]と称する）を対象に行った。対象GHの選定に当たっては、次の3点を考慮した。①共用空間（食堂と談話室）の平面形態が分離型ではない（分節型か一体型）、②共用空間として食堂と談話室以外の空間（和室など）を持つ、③サブ共用空間をもつ場合には、その配置形態が異なる。

各GHの形態の特徴としては、サブ共用空間を[H]と[S]は保有しているが、[A]は保有していない。また、3施設とも独立運営型であるが、[H]は2階部分にも同一平面のGHがあること。[S]は1階部分に玄関ホールで連続した位置にほぼ同一平面のGHがあり、[A]は2階部分がオーナーの事務所であることがあげられる。

2.2 調査の方法

調査は、日常生活が平均的な連続した2日間の調査時間内（7:00~20:00の13時間）における観察調査と、10分間隔のMAP調査（調査員がGH内を巡回し、各入居者の居場所、行為内容、その周辺状況等を平面図上にプロット）を行ったが、事前から調査員がボランティアとしてGHに入り、入居者と生活を共にしながらの参与型調査による。また、あわせて、入居者の基本属性に関して職員へのヒアリングまたは調査票への記入を依頼した。調査対象者は[H]が8名、[S]が9名、[A]が6名であり、入院中のものを除く全ての入居者を対象としている。

表1 調査対象施設の概要と調査対象者の属性

調査対象GHの略称	[H]	[S]	[A]		
運営主体	有限会社	医療法人	有限会社		
開設年月	2002.4	2002.7	2004.3		
定員(人)	9×2エント	9×2エント	9		
職員数(常勤/非常勤)	15(12/3)	10(7/3)	10(6/4)		
施設形態	独立型				
工事種別	新築				
延床面積(m ²)	411	207	297		
居室構成(個室×新設:m)	個室(237×364)	個室(3.6×3.6)	個室(364×364)		
設置階	1階	1階	1階		
居室・共用空間の構成	ホール型	廊下型	廊下型		
食堂と談話室の構成	分節型	一体型	一体型		
調査対象者数(男/女)	8(1/7)人	9(1/8)人	6(2/4)人		
調査対象者の属性	年齢	~74才	2人	1人	2人
	75~84	4	3	2	
	85~	2	5	2	
	痴呆度	I~II	2人	5人	2人
	III	3	2	1	
属性	要介護	IV~V	3	2	3
	1~2	1人	4人	2人	
	3	4	1	-	
介護	4~5	3	4	4	
調査年月日	2004.7.22・23	2004.7.29・30	2004.8.6・7		

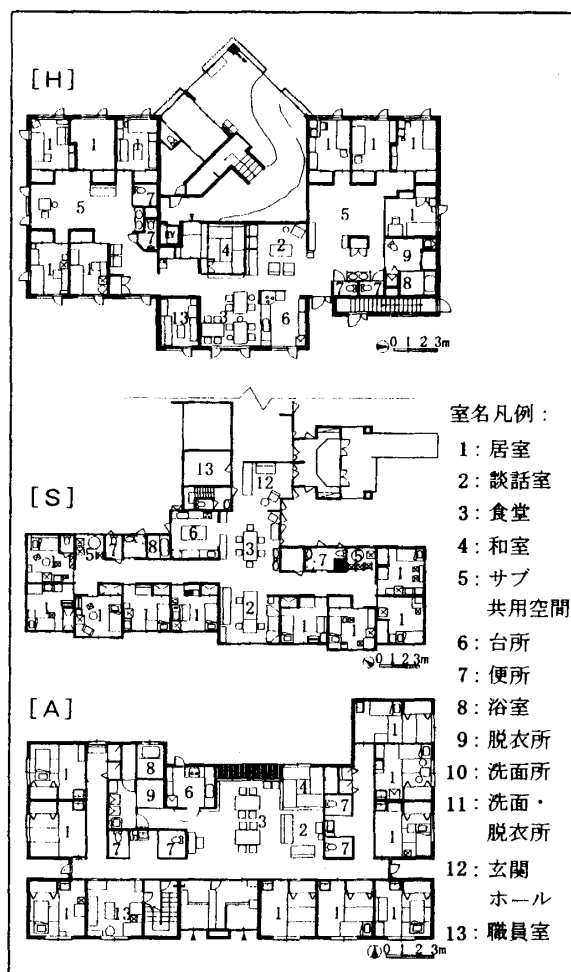


図1 調査対象施設の平面構成

3. 調査結果

3.1 運営システム

基本的な生活行為に対する各 GH の運営方針は表 2 に示す通りであるが、3 つの GH ともほぼ同じ方針で運営されている。食事の準備については、調理に関する作業が 3 施設 3 様である。しかし、配膳や片付けなどの家事作業は職員の声かけにより、出来る人に出来る分だけ手伝ってもらうことになっている。3 つの GH とも洗濯物を干す・たたむ等の家事作業や掃除や散歩等への参加も自由であり、特に決められた作業は課せられていない。

また、各 GH における 1 日の生活プログラムは表 3 に示す通りである。3 食の食事時間が各 GH によって若干異なるものの、午前中に掃除や受診を済ませ、午後にはレクリエーションや散歩、簡単な家事作業を行っており、3 つの GH ともプログラム内容に大きな違いはない。1 日 3 回の食事と午前・午後のおやつの時間が食堂で設けられていることと、GH によっては入浴日が決められていることを除くと、基本的にはプログラムとしての日課は設定されておらず、入居者の自主性を重んじた生活スケジュールになっているといえる。

3.2 生活展開における生活行為と場所

各 GH の入居者全体の 1 日（起床から就床までの 79 場面）の場所別の滞在割合を経時的に示したのが図 2 である。なお、各 GH の 1 日目と 2 日目を比較すると若干の違いは見られるものの、ほぼ同じ生活様態を成しているため、サブ共用空間の利用が多く見られた 2 日目の調査結果を分析対象とした（以後、同じ）。図 2 より、各 GH とも入居者の生活の場は、居室・談話室・食堂が中心であることがわかる。また、入居者は、それぞれの施設の生活プログラムに応じて滞り場所を変えているが、自由時間の空間の使い方には個人差が見られ、GH 毎に若干の違いが見られた。

サブ共用空間を持つ[H]・[S]と持たない[A]を比較すると、[H]では入居者が一つの場所に留まることが少なく、入居者が自由に居場所を選択していることがわかる。[S]でも入居者の移動はそれほど多くはないものの、サブ共用空間の利用や、その他の共用空間の利用も見られた。しかし、[A]

表 2 各 GH の運営方針

項目	[H]	[S]	[A]
入居者	・65歳以上の認知症の高齢者で、共同生活を送ることに支障がないこと。		
食事	・3食とも食堂のほぼ同じ席で食べる。		
食事の準備	・一部の入居者が職員の声かけにより準備(配膳、調理手伝い等)を手伝う。	・副食は母体施設から3食運ばれ、主食は職員が行うが、一部の入居者が職員の声かけにより準備(配膳等)を手伝う。	・調理専門の職員が朝食は全て行い、夕食は介護職員が全て行う。
食事の片付け	・一部の入居者が下膳などの簡単な作業を行う。たまに職員の声かけにより皿洗いをを行う。	・一部の入居者が下膳などの簡単な作業を行う。	・一部の入居者が、下膳などの簡単な作業を行う。
洗濯	・洗濯機を使う作業は全て職員が行うが、干す・たたむなどの作業は一部の入居者が職員の声かけにより行う。		
掃除	・出来る入居者だけ、職員の声かけにより、作業(雑巾で手摺をふく等)を手伝う。		
散歩	・職員が声かけをして、行きたい入居者だけが行く。		
入浴日	・入居者は自分の好きな日に入浴でき、入浴日は特定されていない。	・火・水・金の中で、入居者は週に2回程度入浴する。	・月・火・木・金の中で、入居者は週に2回程度入浴する。

表 3 各 GH の 1 日の生活プログラム

時間	[H]	[S]	[A]
7:00	・起床 ・着替え、洗顔	・起床 ・着替え、洗顔 ・テレビ、新聞読む	・起床 ・着替え、洗顔
8:00	・朝食	・朝食	・朝食
9:00	・掃除 ・新聞を読む ・受診	・掃除、受診 ・新聞を読む	・掃除、受診 ・新聞を読む
10:00	・お茶	・お茶	・お茶
11:00	・体操、テレビ ・昼食準備	・体操、テレビ ・休息	・体操、テレビ ・休息、日光浴
12:00		・昼食	・昼食
13:00	・昼食		
14:00	・昼寝 ・買い物 (自由時間)	・レクリエーション ・散歩 (自由時間)	・談話、テレビ (自由時間) ・洗濯物たたみ
15:00	入浴 ・おやつ	入浴 ・おやつ	入浴 ・おやつ
16:00	・テレビ	・テレビ	・テレビ
17:00	・夕食準備 (自由時間)	・レクリエーション ・横になる (自由時間)	・談話 ・買い物 (自由時間)
18:00	・夕食	・夕食	・夕食
19:00	・テレビ、談話 ・就寝準備	・就寝準備	・テレビ ・就寝準備
20:00	就床	就床	就床
21:00			

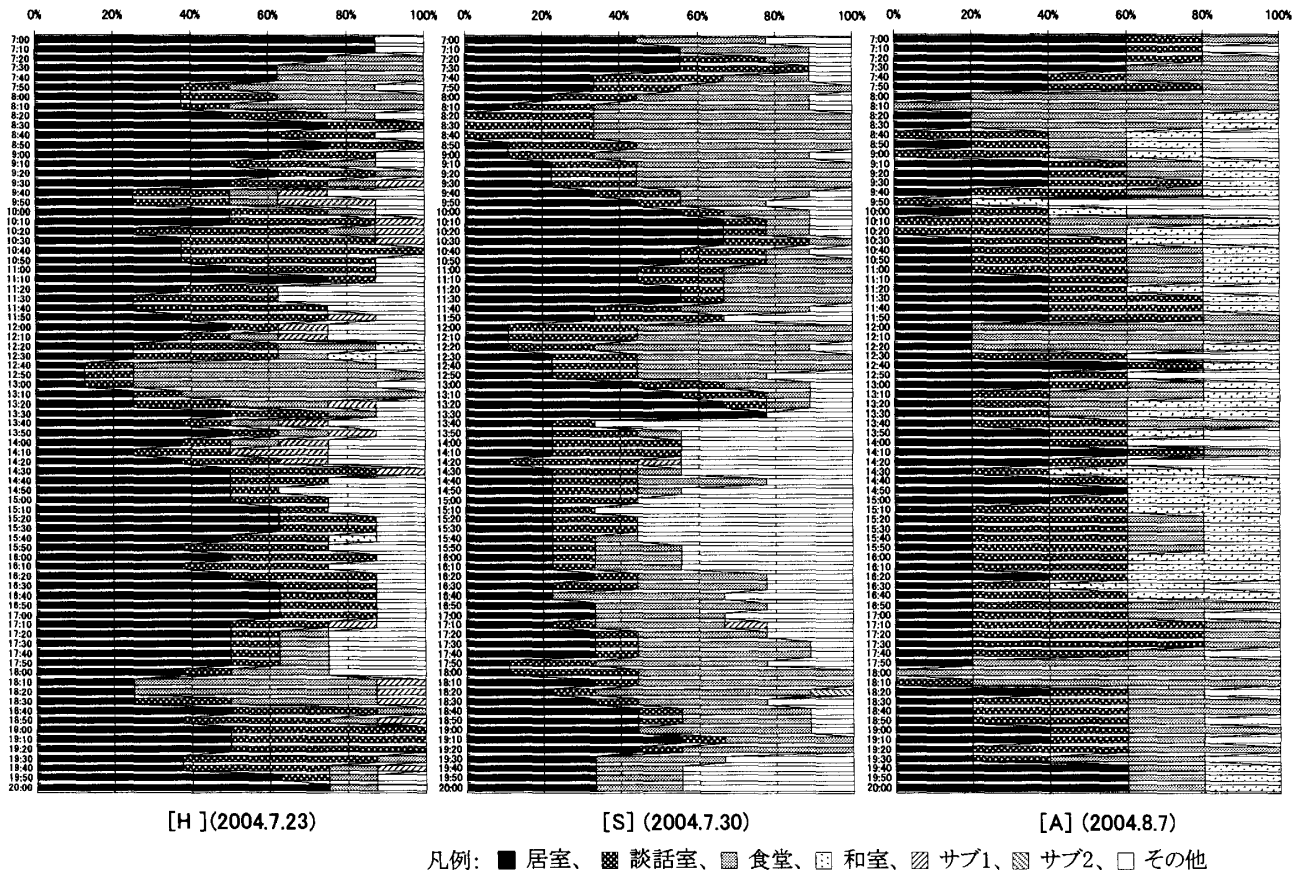


図2 1日の生活場所（経時的場所別滞在割合）

では、共用空間の滞在は多いものの、空間の移動は少なく、談話室と和室にしか生活展開の広がりが見られなかった。これより、サブ共用空間や他の共用空間の有無は、入居者の居場所の選択に影響を与えていると考えられる。

3.3 サブ共用空間の比較

3.3.1 サブ共用空間の利用とそこでの行為

前述したように、[H]・[S]では、一日の生活の中では若干ではあるがサブ共用空間が利用されていた。そこで、サブ共用空間の使われ方をみるために、[H]と[S]における入居者全体の1日の生活場面（起床から就床までの79場面）の中から、サブ共用空間が利用されていた場面を抽出して図3に示した。

両GHとも、共用空間（食堂や談話室）には、比較的に入居者が集まりやすく、そこで行われる行為も、会話やテレビ鑑賞、食事などの他者との関わりを持つ場として利用されていたが、サブ共用空間では、涼んだり、外を眺める行為などの個々

人で利用する場面が多く見られた。このことから、サブ共用空間は、共用空間ほど他者と一緒に過ごすことはないものの、誰かの気配を感じ取りながら、一人であることのできる空間としての役割を果たしているといえ、平面構成の工夫の仕方によっては、入居者の生活展開に広がりを生むことが期待できると考えられる。

また、両GHとも、居室群が左右二手に分かれた2居室ユニット構成になっており、各居室ユニットが、居室群に囲まれたサブ共用空間を持つように平面計画がなされている。これは、居室ユニット毎の小規模（4~5人）のコミュニティ形成を狙ったものであり、入居者自身の積極的なサブ共用空間の利用を促すためと考えられる。しかしながら、どちらの居室ユニットにおいても、入居者間のコミュニティ形成はほとんど見られなかった。さらに、前述したように、入居者自身が積極的にサブ共用空間を利用し、新たな行為を展開する場面もあまり見られなかった。これらのことから、入居者は、居室と共用空間の日々の往復

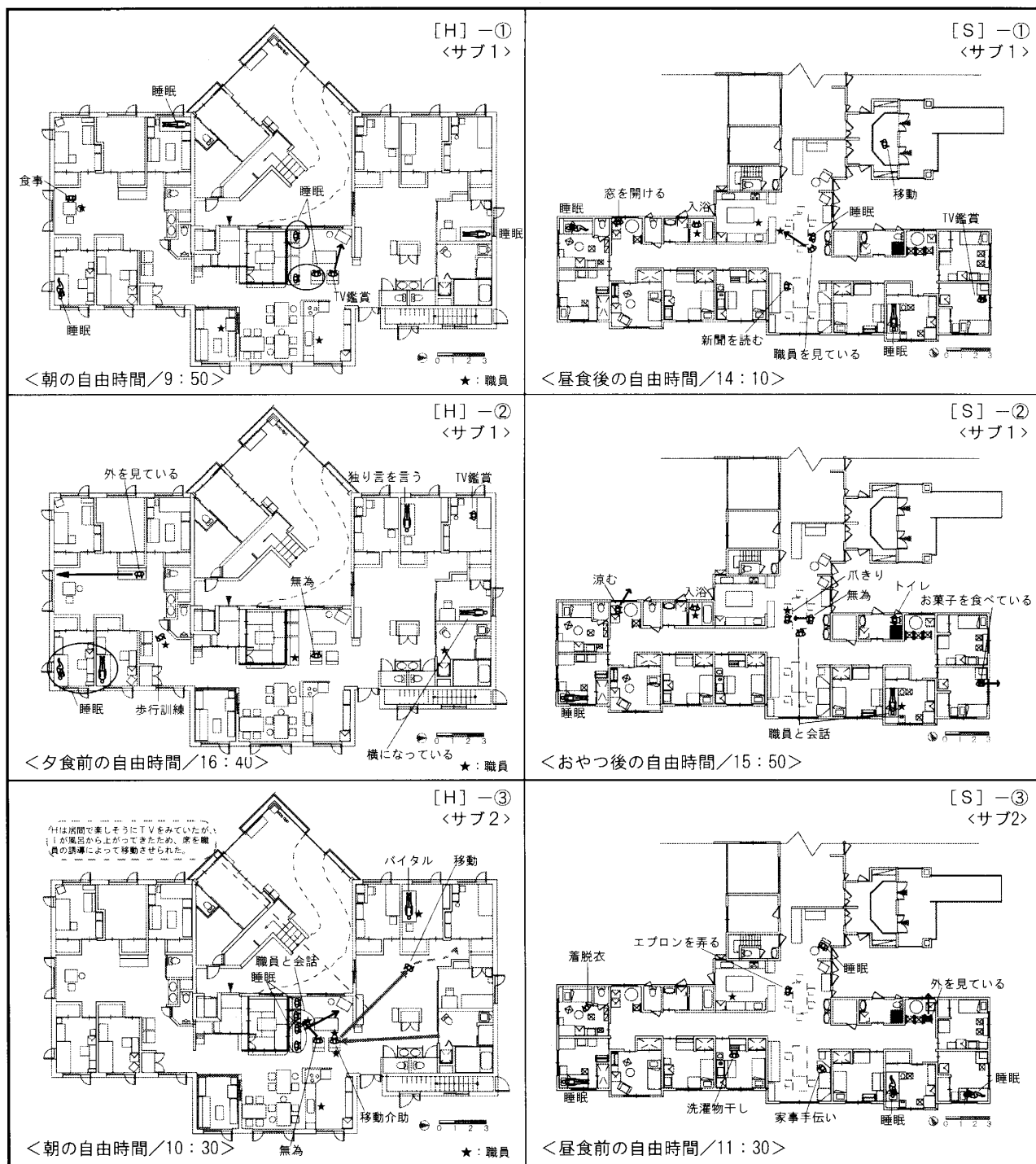


図3 サブ共用空間の利用場面

の中で、居室は寝室、共用空間は食事や会話などの場として空間を使い分けていることが伺えるのに対し、サブ共用空間の利用目的は明確なものではなく、消極的な利用しか見られなかったといえる。

以上より、新たなサブ共用空間をただ単に設けても、入居者の意思だけでは、積極的に利用され難く、有効に利用されるためには、職員からの働

きかけや、日々の生活の中での利用のきっかけが必要になってくると考えられ、運営計画との連携抜きにサブ共用空間を設けても、入居者が積極的に利用することはあまりないといえよう。

3.3.2 サブ共用空間の構成の違いによる比較

[H]と[S]の2箇所のサブ共用空間(＜サブ1＞

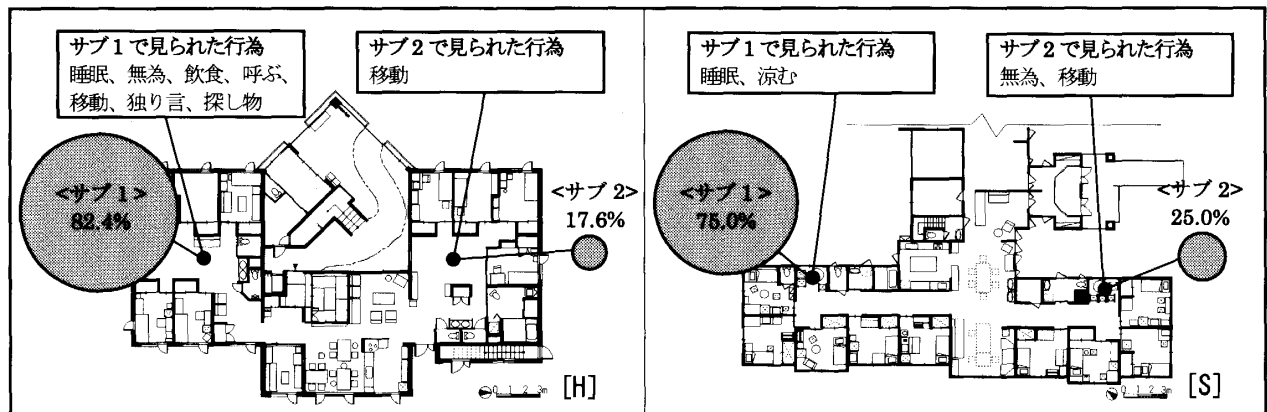


図4 サブ共用空間の利用比較

と<サブ2>)間の利用の程度差を、滞在件数の割合で示したのが図4である。

まず、[H]と[S]のサブ共用空間の利用を比較すると、[H]の方が行為種類が多く、その利用頻度も多くみられた。これは、[H]のサブ共用空間の方が広いためと考えられる。

次に、2箇所のサブ共用空間の利用を比較すると、両GHとも、<サブ1>の方が滞在割合が高く、行為種類も多い。これは、[H]の場合は、<サブ1>には外部に面した大きな窓があるのに対し、<サブ2>には半屋外空間に面した開口しかないため、暗い印象を受け、更に、<サブ1>にはテーブル・椅子・ソファが置かれ、入居者が滞在できる環境が整っているのに対し、<サブ2>は洗濯物干し場として利用されていたことが原因であると考えられる。また[S]の場合には、両サブ共用空間の建築的な環境条件（明るさなど）は同じであるものの、<サブ2>が車椅子置き場となっていたことが原因と考えられる。

以上より、入居者は滞在環境が整っているサブ共用空間の方をよく利用していると言える。

4. 考察（まとめ）

本研究では、サブ共用空間の物理的環境が大きく異なるGHにおいて、入居者の生活展開に関する実態調査を行い、今後のGHのサブ共用空間の計画に当たって、次のような基礎的指針を得ることができた。

サブ共用空間という新たな生活空間を保有して

いるGHであっても、入居者が積極的にサブ共用空間を利用する場面はあまり見られず、サブ共用空間が入居者の生活展開に与える影響は大きいのかの結論は出なかった。しかし、GH側の運用の仕方によっては、有効な空間になる可能性は否定できない。①そのためには、サブ共用空間の積極的な利用を促すような運営方針が必要である。②さらに、サブ共用空間を設ける場合には、ただ単に設けるのではなく、物理的環境を整える必要があるといえる。

最後に、調査にご協力いただいた各GHの方々
に厚く謝意を表したい。

参考文献

- 文1) 石井敏他：グループホームにおける生活構成と空間利用の特性、日本建築学会計画系論文集 No.502、1997.12
- 文2) 鈴木健二他：痴呆性高齢者グループホームにおける空間の構成と入居者の生活・スタッフのケアの展開、日本建築学会計画系論文集 No.556 2002.6
- 文3) 隼田尚彦他：共用空間における人間関係の形成と共用空間のあり方、日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）、2002.8

（本研究は、平成15年度三井住友海上福祉財団の研究助成を受けた。）